

「コーチ学」の経緯と展望

吉田敏明¹⁾

The Circumstances and Perspective of Sports Coaching Study

Toshiaki YOSHIDA

Abstract

According to the related literature on “Sports Coaching Study”, it seems to commence in the late 1950’s in order to utilize sports science for coaching practices. Researchers point out that sports coaching study should be distinguished from the related disciplines in sports science and should systematize the sports science outcomes which have direct relation to coaching practices.

In 1994, “Introduction of coaching methodology” refer to as “sports coaching study” in this study, is published by a coaching methodology committee in the Japanese society of Sports Methodology, and fact gives us an impression that sports coaching study is progressing to next level at last. Thereafter, however, sports coaching study has not even reached this level, and consequently, one has to say that sports coaching study is still highly undeveloped field.

In this study, various issues regarding sports coaching study are highlighted. Those issues considered science and practice, the objective of sports coaching study, general theory and specific theory, and effective systematization of the pertinent factors relating to sports sciences.

From resulting the discussion, perspective of sports coaching study is guided. First of all, estrangement between science and practice has to be recognized by both sides and enhancement and accumulation of the analytical studies on the related factors to coaching practices should be implemented. More importantly, sports coaching study again has to be realized as applied science. In order to utilize the outcome of applied science, sports coaching study should incorporate a coaching education. And furthermore, systematization of the knowledge of the sports sciences and prosopography of successful coaches should be implemented. The selected method of those studies would generally be in a descriptive manner because of the difficulty of understanding the entire coaching practices with statistical analyses.

Sports coaching study seems to be poised in a delicate position. In view of this, a drastic paradigm shift, and essentially the reorganization and the methodological approach to sports coaching study, which includes clarifying the name of this study and the method of the research, are required. This should be the way to establish new horizon for sports coaching study.

Key words : Sports Coaching Study, Coaching, Perspective

1) 競技スポーツ学科

I はじめに

「コーチ学というジャンルはあるが、体育・スポーツ科学の根幹的な部分でもあるにもかかわらず、このジャンルは極めて未分化な要素が多い。」(小林, 2004a) コーチングに関する学問は、依然未成熟な段階にあるという指摘である。確かに先達の努力により、着実に変革を遂げてきたが課題は山積していると言えよう。この領域がひとつの学体系であるとする限り、コーチングに関わる様々な理論を体系づけ、それを基にして得られた知識を蓄積し、研究方法を明らかにしなければならない。いずれの学問でも常に発展途上であるわけだが、この領域においては特に、その感が強い。

現在我が国において、コーチ学を冠した学科科目あるいは講座を持つ大学のほうが、少数派に属している。「体育系の学部・学科を有する大学において『コーチ学』を確立することが急務である。」(日比野, 1994)との指摘通り、学体系を構築していくためには、大学においてその名を冠した学科目をおき、研究者を有することが、その学問の存在が認められるということでもあろう。内容論はともかく、わが国の主要と思われる体育・スポーツ系の学部・学科を有する大学約20校¹⁾のシラバスを見ると、コーチ学という名称を使用している大学は半数以下と少ない。コーチ学に関連深いと想定される講座名、学科目名は、コーチング学、コーチ論、コーチング(理論)論、運動方法学、スポーツ方法学と多様である。加えれば、「スポーツ学のみかた」(大森, 1979)でスポーツ専門諸科学(スポーツ科学)の学術領域が紹介されているが、そこには、コーチ学がない。一般的であるかに見えるコーチ学という名称そのものでさえ、論議が入り込む余地があるのである。これらのことからしても、いわゆるコーチ学は、例えば心理学(Psychology)や生理学(Physiology)として普遍的立場を確保してきた領域とは異なる

る性格を持っていると容易に推察できよう。

このような問題を察すれば、まずコーチ学という学問の概念規定、定義づけを論究する必要があるが、本論は「コーチ学」を術語学的に論述するものではないので、それらについての深い考察を避け、緊急的にコーチ学を括弧付きのコーチ学(「コーチ学」)として本論を出発することにする。ところで、「コーチ学」の英訳も問題となる。日本スポーツ方法学コーチ学研究委員会(1994)によれば“Coaching Methodology”となる。ある関連論文(清水他, 2002)のタイトルでは「Instructive Study」として「方法」を強調している。確かに、「コーチ学」は方法学という性格を持つ。しかし、本稿では、単に「方法学(Methodology)」ではなくて、さらに幅広い領域を含むという意味を持たせることにするため、“Sports Coaching Study”とする。

II 「コーチ学」の経緯

ここでは従来に行われた「コーチ学」、あるいは当時の「コーチ学の現状と展望」などについての論述を振り返り、「コーチ学」の現在に至るまでの経緯を概括する。

1. 「コーチ学」の萌芽

我国におけるスポーツの歴史・経緯等を論ずるときに、「武道」を無視することができない。本章においては、「武道」の詳細、歴史等を論ずるものではないが、一言すれば「武道」が「コーチ学」になにがしかの影響を与えたと理解してさほど誤りはなからう。すなわち、在来の「武道」独特の精神が強く残っている時に、武道に良く似た性格、つまり勝敗を競うという性格を持つ「スポーツ」が輸入された。このことにより、日本のスポーツはたちまち濃い武道色を帯びていく経緯の中で、スポーツの精神主義、鍛錬主義が生まれ、スポーツの指導と科学とくに自然科学との結びきはなかったのである(多和, 1977)。

また、戦前においては、スポーツは科学の研究対象となっていなかったし、スポーツの指導（コーチング）という観点から体系的に研究しようとする試みはほとんどなかった（金原，1973）。このような状態からの脱却を狙った論調が1950年代後半に生まれる。

1957年に出版された保健体育大系の「コーチングの科学」（東監修，1957）に「コーチ学」という章が立てられた。この章では、主に発育発達等の観点から選手の資質、成長について論じられている。これは、おそらくこの著の「はじめに」における前川の「まずはスポーツ（選手）資質の予見が大事」という指摘を踏まえての構成と考えられるが、概して、この著の目的は、「コーチ学」の確立へ向けての出発であったと思われる。

その後、1960年に笹本（1960）の「コーチング理論」が現れ、コーチングの一般的な理論や技術を、系統的に取り扱うことが試みられた。この著には「コーチングの技術」という章があり、そこでは運動学習論、力学に若干触れるなどして、科学の基礎的知識の導入を計っている。

一方、時期をほぼ同じくして、わが国のコーチングの実践において、スポーツに科学を取り入れようという声が沸きあがっている（多和，1977）。この時期は、ローマオリンピック（1960年）が終って東京オリンピック（1964年）へ向けての準備の始まりである。国際競技力を向上させるために、それまでの精神主義、根性主義から脱皮し科学的トレーニングの推進を目指そうというのだ。このような時代背景の中で、「コーチ学」は、科学的トレーニングの導入の旗頭になろうとして、萌芽したと考えられよう。

2. 研究領域等の明確化へ向けて

その後まもない1967年、金原は「コーチ学」の内容、研究領域等を提言する。金原（1967）によると、「コーチ学」とは「スポーツにおいてよりよい成績を上げるための合理的指導

に関する知識を体系的にまとめたもの——ひとつの科学的観点から研究領域を捉えて研究する基礎諸科学と区別しておく必要がある。」として、基礎諸科学とは異なって、指導に直結する問題を体系的に研究する必要があるという立場を取り、具体的な研究領域を明示した。金原（1973）は追って同誌において「コーチ学の領域」を論述しているが、その基本的理念は大きく変わることはなかった。

そうしたなかで、学際的研究の必要性が謳われるようになる。多和（1977）は「幅広い学際的な知識の上にコーチングに関する研究を推進するようになったとき、初めて学際的な学問領域としてのコーチ学が確立されるものと信じる。」としている。そのような論調を察してか、学際的と考えられる論文も出現する。例えば、「生力運動技術の客観的および主観的特性に関する生力学的およびコーチ学的研究」（金子ら，1997）などのような客観と主観という異なる領域にまたがる研究も行われるようになった。

このような道程を歩んできた「コーチ学」であるが、基本的には金原の影響が大きく、それらが脈脈と今日に受け継がれている。永嶋（2000）が「スポーツ方法学会20年の歩み」の冒頭において指摘するとおり、「コーチ学」はスポーツ方法学の構成領域のひとつとして、スポーツの実践に資すること、それに一般コーチ学、種目別コーチ学の体系化を目指すのである、とするに至っている。それらのことが「コーチ学」の主軸となって現在にあるとってよからう。

3. 学会等の動き

さて、ここではどうしても「コーチ学」に関する保健体育審議会や学会等の動きを見ておく必要がある。まずは、1989年の保健体育審議会答申である。「大学における体育・スポーツの振興」に関する保健体育審議会の文部大臣への答申が1989年に行われた。その骨子は、コーチングの関連分野を総合する学問

としての「コーチ学」の確立に努めることである。「諸関連分野」をどのようにして総合するのかという問題点はさておき、「コーチ学」が学問として扱われたことは意義あることであった。

このような中、コーチ学研究に新たな動きが芽生えた。1990年に日本スポーツ方法学会に、「コーチ学研究委員会」が発足したのである。そして、1994年「コーチ学研究委員会」は「コーチ学入門」(1994)を出版するに至る。「コーチ学」のまとめを学術団体が実施した初のことであった。「コーチ学入門」においては、「コーチ学」を方法学として構築を目指し、コーチの役割、資質等を論ずる「コーチ学原論」、関連6領域から論ずる「コーチ学基礎論」、そしてコーチングの実際を論ずる「コーチ学実践論」が著わされた。課題は様々あるにせよ、学術団体が公に「コーチ学」をまとめたという点で、「コーチ学」がよいよ萌芽から確立へ向けて進み始めた時期とも言えよう。しかしながら、その後の「コーチ学」は萌芽から確立、充実という進展がみられず、今日に至っても以前未成熟性が指摘されるのである。

Ⅲ 「コーチ学」が直面する問題点

「コーチ学」の未成熟性は「コーチ学」がその性質上直面することを余儀なくされる問題点によるものと考えられる。そこでここでは、いくつかの問題点に着目して論を進めることにする。

1. 科学と実践の乖離

近年医学で言われるEvidence based Medicineなどの影響が、スポーツのコーチングの世界でも、いまさらながらという感をぬぐえないが、事実や根拠それに科学をベースにしたコーチングを行うべきであるというEvidence based coaching (Rushall 2004)あるいはScience based coaching²⁾の重要性が謳われる。コーチや選手の感覚、感情、経

験等々と葛藤しながらも、科学によって導かれた原理原則に則して、客観的にコーチングを遂行することにより、その成果を高めることができるということである。

一方では、相反した現実もある。「スポーツ技術のコーチングが科学化されにくい」(小林2004b)傾向を持つし、科学を受け入れないスポーツという構図もある。

科学的トレーニングや確率論的戦術遂行が「勝利」の確率を幾分かでも上げることができようが、それによって勝率が100%になることはまずなかろう。現在の科学では説明しにくいこと、例えば「運」などの不確定要素が勝敗を決する要因となることもあるのが実際である。「人間が有する本来の素朴な運動能力こそ“勝つ鍵”だと信じている。」(水谷(2001)の論文中の引用)という指摘があってもそれほど不思議なことではない。

加えれば、村木(1991)は「コーチングおよびトレーニングが——、むしろ人間的な工芸制作的なものであることを意味する。」と指摘する。実践の内実がよく表現されていると考える。コーチの判断は、コーチに内在するその時点における独自の思考を拠り所とする人間の複雑な意思決定プロセスによる場合が多い。その姿は限りなく工芸的であり、芸術的職人的制作過程にも似ていると言えよう。この立場に則して極論すれば、コーチングに関する多様な判断は、科学的研究成果あるいは「コーチ学」的研究によって生まれるものではなく、むしろコーチングの実践の過程において産出されるとも言えよう。

いずれにしても科学と実践の乖離は、今に始まったことではないし、簡単に終止符が打たれるような性格の論議ではないことは自明である。従って、むしろその問題を受容していかん建設的方向性を導けるのかということが視点になろうか。

2. 研究方法についての問題点

(1) 研究対象について

次に、「コーチ学」の研究対象について端的に触れる。「コーチ学入門」(1994)において、「ここでいうコーチングとは、学校体育における実技指導とも生涯スポーツにおける実技指導とも異なる、チャンピオン・スポーツにおける競技力向上のための指導法である。」と明解している。しかし、嶋田(1998a)が「これまでのスポーツ指導理論は主に初心者指導論であり、入口理論に終始している傾向にある」と指摘するように、「コーチ学」においてチャンピオンスポーツを対象とする研究が比較的少ないのが現状と言えよう。勝利への道程、勝利の鍵を探ることがチャンピオンスポーツ研究では純粋な興味である。にもかかわらず、それに対して鮮明な焦点を合わせた研究が比較的少ないのである。

様々な観点から理由は論ぜられよう。が、それらの中一つには、次項(3)においてその理由が言及される通り、トップの競技者や優れた指導者を対象にした研究は取り掛かりにくい面があるということが上げられると思われる。

(2) 一般論と個別論

ところで、嶋田(1998b)は「各種スポーツには、それぞれある特定の特性があるが、同時に全てのスポーツに共通な原則、共通性、規則性も存在するはずである。」とする。これに律すれば、「コーチ学」としてコーチングの一般論構築を目指そうとすることは、アカデミズムの観点からのみならず、実践の指導者にも有意義であると言えよう。

一方、小林(2004b)は「教え手(コーチ)は、習い手の様子に合わせて指導を行うが、個人差が大きいと、個別指導の要素が多くなり、一般的で普遍的な指導の法則的手法といったものが形成されにくい。」として一般論探求の厳しさを示す。実際、一般理論の非有効性が実践コーチの間では取り出されることが多々ある。

確かに、スポーツの種類はおびただしい数に上り、それぞれ異なった構造を持つ。加えて、選手の特長(性格、身体、教育的背景、競技経験、技術レベル、あるいは感覚等々)やコーチングを取り囲む環境条件もそれぞれで異なる。さらには、コーチ自身も各々独特な感性、背景等々を持つ人間であることを考えれば、コーチングとは極めて個別性の強いものであることが容易に察することができよう。

こうした背景の中で、永嶋(2000)は一般方法学の体系化には各スポーツ種目の個別コーチ学理論さらに一般コーチ学理論に基づいた体系化が必要であるとし、一般コーチ学の存在、そしてその構築を支持するのである。様々な課題があるが、「コーチ学」は個別論、一般論両面にわたっての構築を目指すものとして今日を迎えていると考えて差し支えなからう。

(3) 研究方法について

さて、一般論を導き出すためには、帰納法的と演繹的手法が施されるのが一般的であるとされる。その中でも、続(1975)等によれば、個別性が極めて強いコーチングにおいては、帰納法的研究である実践研究、事例的研究等が有効な研究手法となる。コーチングにおいては、経験知や経験則を無視できず、優秀な成績を収めたコーチや選手の実践した準備過程、あるいは競技中の思考や行為などを集積し帰納的に一般論を導き出そうとするのである。しかし、この研究法にも様々な問題点が降りかかる。

問題点のひとつに、「秘密」があげられよう。一流の競技者は自ら実践している事のすべてを「——ライバルたちに知られることを望まない。つまりデータは常に秘密のバールに包まれている。」(渡辺, 2004)このようにチャンピオンスポーツの場合、勝利の内実はその選手やコーチの中に閉ざされているケースが多い。

一方、優れた成績を収めたコーチによって、

その成功の背景、言ってみれば秘密が一般書によって開示されることがある。ところが、商業ベースによる学術的体裁を持たない一般書は、当然のことなのだが、決してアカデミックな立場に置かれることはない。真実を持つコーチのことは学問にはならないのである。一方、研究者によるものは学問になりうる。が、研究者は、実践コーチや競技者に閉ざされている真実を引き出すには極めて難しい立場に置かれていると言えよう。

その問題に立ち向かうために、研究者と実践者を兼ねて真実を集積しようとする研究も存在する（例えば吉田（1993）、中西（2003））。しかし、それらが「コーチ学」の研究方法のひとつとして確固たる地位を築きあげたとは言いがたいのが現状である。

（4）体系化について

「コーチ学」研究の問題点はまだ他に多くある。その中で、関連諸科学に関する知識の体系化は重要な点となろう。

「コーチ学」的研究の多くは、厳密科学志向の分析的研究である。しかし、分析的研究の積み上げでは、その体系化の構造は見えてこない。ましてや、体系化は単純な作業ではない。「既に存在する情報を一つのトータルシステム（全体システム）として総合化するための『構造』を見出すことができないために、問題解決がうまいかない」³⁾との指摘を受けて言えば、コーチングに関する様々な部分的知見はあるのだが、それらを体系づける「構造」が明確でないということになろう。

構造を明確にして体系化するためには、システムダイナミックス的な数量化などは有力な研究方法となりうる。しかし、前述した通り、実際のコーチングとは、数量化では、決して言い尽くせないことがあり、それがコーチングの急所とも言える。つまり、操作的定義による厳密の研究から離れた方法でないとコーチングの内実、全体像は見えてこないのではないだろうか。そこで記述的定義による研究が着目されよう。例えば、嶋田（1998）

は「スポーツ・コーチング学」において、コーチングの全体を体系化するための構造を独創的な「ストリーム理論」と「トリー理論」に求め論を進めた。無論様々な見解はあろうが、一つの成果であろう。しかしながら、その研究方法が記述的であるだけに、それが厳密に吟味されると、様々な論議が醸し出される可能性もあろう。

Ⅳ 「コーチ学」研究の展望

最後に、若干の論議も含めながら、「コーチ学」の展望について論ずる。

第一に、従来の経緯を踏まえれば、チャンピオンスポーツが「コーチ学」の研究対象であることを再確認し、科学と実践の乖離を科学と実践の両者が謙虚に受容することが必要か。そして、現場への還元を遠めに見ながら「コーチ学」の厳密研究の部分として、分析的研究をさらに推進して、その蓄積を図ることが必要と思われる。

しかし、無論それに終始したのでは「コーチ学」の理念に沿わない。つまり、関連諸科学の知識の体系化が「コーチ学」の課題とすれば、体系化が焦点を浴びなければならない。その際、記述的な方法をとることによってはいじめてコーチングの実際の総体を捉えることができるのではなかろうか。

「研究成果を現場に生かす、現場に生きる研究」が「コーチ学」の課題とすれば、以前から取り出されていることであるが、「コーチ学」は応用科学であるとの再認識が必要になろう。

しかし、如何に実践における有効性あるいは実践への適用の仕方を導き出しても、コーチの興味なしではそれらは永遠に学問の中に埋没する。この点、より大きな環境条件（例えば、コーチ教育等々）と関係づけての検討が必要になろう。これに関して「コーチ学」が遠目からでも一石を投じることができればよかろう。

さて、医学では、科学的研究成果による治

療のガイドラインがある。しかも、実践の治療はそれによって厳密に拘束される。コーチングの世界でも、近年、種目によっては優れたガイドラインが作成されている。非常に意義の或ることである。が、医学のような実践に対しての拘束力を持たない。むしろ、実践のコーチングは、医学などとは性格が異なり、コーチの創造性を必要とするものであるし、コーチの判断が重要な位置を占める。コーチングにおける様々な判断は、人間として独特であるコーチに委ねられる（coach drivenである）ことが多いのである。従って、そのコーチという人間に焦点を合わせないと見えない部分が多々ある。だから例えば、「○○○○の研究」という人物研究が望まれよう。その人物に関わる言説、行為等を再現し、それらが、成し遂げられた業績にどのように関わるのかといった観点からのアプローチである。しかし、この研究方法は「方法学」という枠組みを逸脱している感が強いこと、また、記述的な方法が用いられるという理由で様々な論議を醸し出すことになろう。

それにしても課題は山積している。敢えて悲観的に言えば、このままでは、現在の未成熟な「コーチ学」は、今後もさらに、その不確実性、非現実性、不毛性が取り立てられ、立場をなくす危機性があるのではなかろうか。この状況を脱するには、さしずめ大胆なパラダイム変換が必要になろう。「コーチ学」という名称の再検討、独自の研究方法開発等々を含めた、あらたなアプローチの仕方を自ら再編成することで、この学問にあらたな地平を拓くことができるのではなかろうか。

注

- 1) 調査した20大学。仙台大学、日本体育大学、東京学芸大学、日本女子体育大学、大東文化大学、東海大学、国際武道大学、早稲田大学、中京大学、中京女子大学、びわこ成蹊スポーツ大学、大阪教育大学、大阪体育大学、筑波大学、順天堂大学、鹿屋体育大学、福岡教育

大学、福岡大学、国士舘大学、茨城大学（順不同）

- 2) 米国のPositive Coaching Allianceにおいて Science-Based Coaching という語が用いられている。（<http://www.positivecoach.org>）
- 3) ホリスティック教育，<http://www.kcn.ne.jp/~gauss/holos/systems.html>から引用した。

引用・参考文献

- 東竜太郎監修（1957）保健体育学大系 コーチングの科学，中山書店
- 笹本正治（1960）新体育学講座 第7巻コーチング理論，造遥書院
- 金子今朝秋他（1998）砲丸投技術の主観的および客観的特性の関わりに関するコーチ学的研究，順天堂大学スポーツ健康科学研究2巻：pp.44-53
- 笠井恵雄（1977）体育方法学研究の経過と今後の課題，体育の科学27巻5号：pp.312-315
- 日比野弘（1994）第Ⅱ章 コーチングの基礎，コーチ学入門 日本スポーツ方法学会コーチ学研究委員会：p.13 日本スポーツ方法学会コーチ学研究委員会
- 金原勇（1967）コーチ学的な研究について，体育科教育15巻6号：pp.9-11
- 金原勇（1973）コーチ学の領域，体育の科学23巻1号：pp.6-9
- 小林寛道（2004a）特集 スポーツ技術の指導，体育の科学 54巻2号：p.89
- 小林寛道（2004b）スポーツ技術のコーチング，体育の科学 54巻2号：p.98
- 大森千明編集（1979）スポーツ学のみかた，朝日新聞社
- 水谷豊（2000）コーチ学の基礎に関する補遺的一考察，スポーツ方法学研究14巻1号：167-181
- 村木征人（1991）スポーツ科学における事例研究の意義と役割—コーチング理論と実際の乖離撞着を避けるために—，スポーツ運動学研究4巻：pp.129-136
- 中西康巳（2003）競技スポーツにおけるバレーボールのチームづくりに関する研究—T大学女子バレーボール部の2002年シーズンについて—，スポーツコーチング研究第2巻1号

日本スポーツ方法学会コーチ学研究委員会
(2000) 日本スポーツ方法学会10年の歩み. 日本
スポーツ方法学会コーチ学研究委員会
日本スポーツ方法学会コーチ学研究委員会
(1994) コーチ学入門. 日本スポーツ方法学会
コーチ学研究委員会
嶋田出雲 (1998a) はじめに. スポーツ・コーチ
ング学—ストリーム理論とトリー理論による
勝利への道—. 不味堂出版: p.4
嶋田出雲 (1998b) 同上pp.4-5
清水将, 関岡康夫, 橋本実, 勝田隆志 (2002)
女子バスケットボール競技者の前十字靭に関
するコーチ学的研究. 仙台大学スポーツ科学研

究科論文集 3 巻: pp.29-37
多和建雄 (1977) コーチ学研究の現状と課題.
体育の科学27巻 5 号: pp.316-319
Rushall, Brent S (2003) Coaching development
and the second law of thermodynamics [or
belief-based versus evidence-based coaching
development]. Web site publication at Sports
Science Associates
渡辺郁雄 (2004) スポーツ医科学の果たす役割.
体育の科学 54巻: p.271
吉田敏明 (1993) チーム作りに関する事例的研
究—大学女子バレーボールチームの場合—.
スポーツ運動学研究 6 巻: pp.11-22